

積極的に話し、コミュニケーションの質を高めようとする生徒の育成(最終年次)

～効果的に意思伝達をする英語学習者の育成に向けた方略の研究～

館下 真二, 小田 可南子
Shinji TATESHITA, Kanako ODA

概要

1年次研究では、コミュニケーションの機会を求め、積極的に話す生徒の育成を目指した。具体的には、身近な興味・関心のある事柄について既習の知識や技能を生かし、他者との「やり取り」を多く取り入れた。2年次研究では、生徒は、教師が提示した既習表現を使用し、「やり取り」をするのではなく、自ら主体的に必要とする単語や表現を選択、判断して、活用する Try-out 活動^{*1}を継続的に設定した。また、Pre-TEST と Post-TEST を比較したことで、自己の発話を振り返ることができ、コミュニケーションの質^{*2}を向上させることができた。最終年次研究においては、ICT を活用し、プロジェクト型授業における Pre-TEST や Post-TEST の比較や、リフレクションシートを実施することで生徒のメタ認知力の向上や主体的に学習に取り組む態度を高めることができると考える。

キーワード：メタ認知, 方略的能力, Try-out 活動, 主体的に学びに取り組む態度

1. はじめに～研究の目的

学習指導要領(2017年7月)の総則には育成すべき資質・能力が整理されており、学習の基盤となる資質・能力、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力、の2点に大別し、前者には言語能力、情報活用能力、問題発見解決能力が挙げられている。また、それらの育成について、学力の三要素を基にした「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を資質・能力の三つの柱としている。以上のことから、各教科等の学力は、4つの資質・能力と3つの柱で検討する必要があると考えている。

学習指導要領の外国語科の目標及び内容における「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」であると考えられている。つまり、単に自分の考えを一方向的に伝えるだけでは不十分であり、相手がどんなことを考えているか、相手がどのような状況であるか、何を望んでいるかという意向を知ること、すなわち他者意識を十分にもつことが重要となる。

2. 生徒の実態(2年次研究の成果と課題)

本校英語科の2年次では、Pre-TEST や Post-TEST といった自己モニタリング^{*3}を通じて自己の課題に気づいたり、他者により分かりやすい内容にするための手立て

を考えたりするなど粘り強く取り組んだ生徒が増えた。また、プロジェクト型授業では、外部試験において上位層の生徒ほど、練習を積み重ねるごとに、形式的(語彙・文法など)から発表的(アイコンタクト・スピード・音量など)なものに意識が向けられていることが分かった。

社会においても、他者意識をしながら生活していくことが不可欠であり、さらに物事に粘り強く取り組む姿勢が求められることから、生涯にわたって必要な力であるといえる。

昨年度の「英検 IBA」の結果においても、どの学年においても R(リーディング)、L(リスニング)両分野において道平均を 100 ポイント以上上回る高い結果となった。昨年度、3年生の英検 IBA 受験者 102 名のうち 53 名が英検準2級合格レベル、2年生の英検 IBA 受験者 96 名のうち 76 名が3級合格レベルという結果が出ている。

しかしながら、以下のような課題もある。

- ①コミュニケーションがうまくいかなかったときの方略が不足している。
- ②振り返り⇒分析⇒改善⇒計画というサイクルが活用できていない。

①については、Canale(1893)の Strategic Competence (方略的能力)における言い換えや繰り返しといった方法を生徒が「やり取り」の中で繰り返し使用することで身に付いていくと考えられる。②については、Anderson,L.W. 他による A Taxonomy Learning, Teaching, Assessing revised version(2001)における Remember (記憶する)→ Understand (理解する)→Apply (応用する)→Analyze (分析する)→Evaluate (評価する)→Create (創造する)

というサイクルを生徒が授業で継続して行うことでこれまでもっていた知識や経験を関連づけて、学びながら成長していることを自覚的に理解したりする。このようなサイクルを意識させることがメタ認知力の向上につながると考える。

2. 1. 目指す生徒像

本校英語科では、以上の課題や求めを踏まえ、目指す生徒像を以下のように捉え直した。

- ・場面や状況を判断し、効果的な方略を取り入れ意思伝達をすることができる生徒
- ・ICT 機器を活用した継続的な自己モニタリングを通じて、学びを深めることができる生徒

3. 研究主題及び副題

ダイバーシティ社会において、英語を通じて多種多様な人の考え方の違いや個性を受け入れながら成長していかなければならない。その過程において、うまくいかない場面に生徒は直面するであろう。このような場面において、場面や状況を的確に判断し、数ある方略の中から自己や他者にとってふさわしい方略を選択することが重要となる。また、継続して自らの行動を振り返り、次へとつなげることが、生涯にわたり主体的に学ぶことができることにつながると考える。

以上のことから、本校英語科の最終年次研究の主題と副題を以下のように設定した。

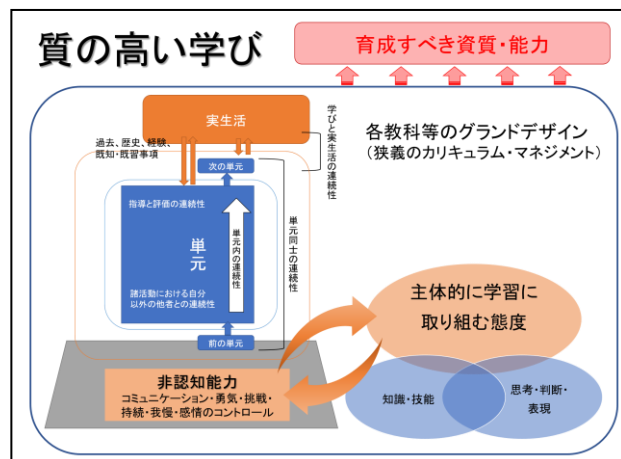
積極的に話し、コミュニケーションの質を高めようとする生徒の育成(最終年次)
 ~効果的に意思伝達をする英語学習者の育成に向けた方略の研究~

4. 研究の内容と方法

本校の最終年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえ、引き続き「質の高い学び」に向かうために、単元や題材における「連続性」、さらには高めたい「資質・能力」を踏まえた単元や題材の全体構想(以下、グランドデザイン)というものを設計することが重要であると捉えている*4。

なお、本校研究の概要にもある通り、このグランドデザインにおいて特に重要視しているのは「主体的に学習に取り組む態度(≒非認知能力)」へのアプローチである。主体的に学習に取り組む態度は、学びに向かう基軸となるものであり、その高まりがさらに質の高い学びを生み、ひいては各教科等における資質・能力の育成につながるものと考えられるためである。

これらのことを踏まえた本校の最終年次研究の構造図は以下である。



本校最終年次研究の構造図

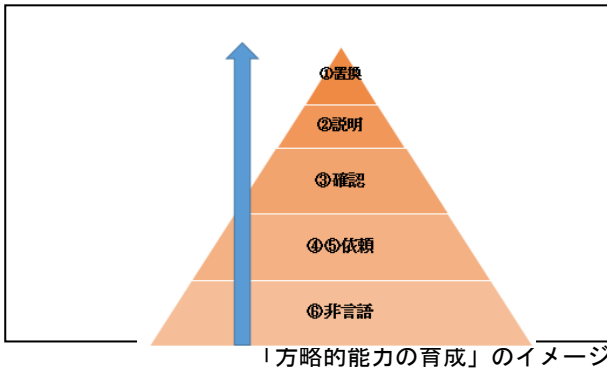
この中で、本校英語科では、特に「諸活動における自分以外の他者との連続性」や「非認知能力の育成」に焦点を当てて実践研究を進めることとした。これらが、「2. 1.」で示した目指す生徒の育成に向かう上で特に重要な視点であると考えたためである。

4. 1. 方略的能力の育成

前述の「諸活動における自分以外と他者の連続性」を実現させる手立ての一つとして、Canale and Swain(1980)のおもに方略的能力の育成をする。これは、具体的には「言いたいけどうまく言えない」「他者の言っていることが分からない」等の場合以下のような方法を取ることがある。

- ①他者に伝わらない場合、別のことばに言い換える。
- ②相手の言っていることばが分からない場合、確認する。
(例) I don't know "○○", what does it mean?
- ③自分の言っていることが、他者に伝わっているかを確認する。
(例) I said ○○, do you understand?
- ④相手の言っていることが早くて分からない場合、話す速度を遅くしてもらう。
(例) Speak slowly.
- ⑤相手の言っていることばが分からない場合、もう一度言ってもらう。
(例) Pardon?
- ⑥ジェスチャーや絵などを活用して他者に伝える。

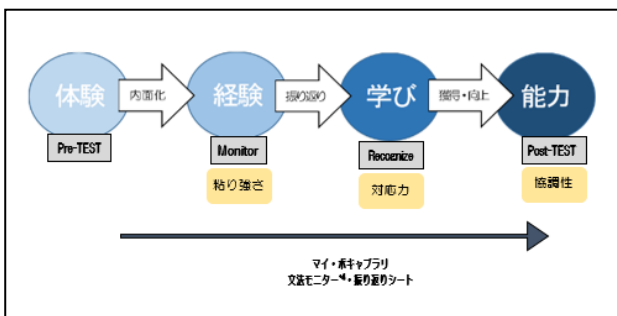
本研究では、これらの方略を活用していくことで、より内容豊かな「やり取り」になると考える。また、「やり取り」がうまくいかなかったときの①～⑥の方略を以下のような図で表した。



これは階層が上がるほどジャスチャーのような非言語的なコミュニケーションではなく、既習語彙や表現を使用しながら会話を継続していく高度な方略となることを示している。様々な方略を使用しながらも、少しずつ①の方略を使用できる生徒を育みたい。また、英語の能力には個人差があるため、他者に合わせた語彙や表現を選択し、使用していくことや、他者に内容を確認したり繰り返し言ってもらったりすることで、自己の英語レベルに合わせてもらうことも必要な方略であると考えます。

4. 2. 「非認知能力」を育む単元学習

生徒の学びの質を高めるためには非認知能力を同時に育んでいく必要がある。以下に非認知能力と本校英語科の授業の単元構成との関わりを図示する。



「『非認知能力』と英語科の授業の関わり」のイメージ

生徒は単元の中で自分自身が伝えたかったことを思うように伝えることができなかった経験や他者に伝わらなかった経験をモニタリングしたり、他者と学んだりしながら、非認知能力^{※5}における「粘り強さ」「対応力」「協調性」を高めていくと考える。

以下のような段階を単元を通して指導していく。

単元開始時

Pre-TEST を行い生徒自身に身に付けている英語力を再認識させる。また、リフレクションシートを使用し、単元終了時に目指す理想の自分を設定させる。

単元中間時

生徒自身に使用している単語や表現が適切なものを振り返る時間を設定させる。生徒は、クラウド上に保存してある、マイ・ボキャブラリ^{※6}、リフレクションシート、録音された音声を確認しながら再構築していく。また、教師もそれらの保存データは、生徒と共有しているため適宜確認できるため、生徒に的確なフィードバックを与えていく。

単元終了時

Post-TEST を実施し、Pre-TEST を比較することで、自己の変容を再認識させる。また、リフレクションシートを活用し、単元開始時に目指した自分に向かってどのような点を工夫しながら授業に取り組んだか、単元を通して何を学ぶことができたかなど生徒自身が学習をモニタリングする。

このような段階を踏むことで、ただ単に知っている単語や表現を流暢に扱うのではなく、目的、場面、状況に応じて生徒自身が使用する単語や表現を判断、選択、表現する、つまり質の高いコミュニケーションになると考える。

5. 実践と考察

以上の2つの手立ての効果を確かめるため、本校英語科では、2つの実践を行った。

5. 1. 実践 A の単元の構想

本実践を行うにあたり、第3学年の生徒がどのように英語学習に取り組んでいるかを知るため、以下のようなアンケートを5月に実施した。

(1)「やり取り」をしていて、他者の言っていることが分からない場合にどのような方法を用いていますか。

(99名回答)

分からないことを英語で伝える。 例) I don't know. I don't understand.	36人
日本語を使用する。	18人
「もう一度言ってください。」と英語で伝える。 例) Pardon? One more time, please.	16人
「ゆっくり言ってくれますか。」と依頼する。 例) Can you speak more slowly?	14人
相手の言っていることを引用して確認する。 例) You mean ~, right? You said ~, right?	14人
分からない素振りをする。(非言語) 分かったふりをする。(回避)	1人

(2) 自分が言っていることが他者に伝わってないと思ったときどのような方法を用いていますか。(99名回答)

分かりやすい単語や表現に置き換える。	40名
ジャスチャーを使用する。	25名
ゆっくり話したり、大きな声で話したり話し方を変える。	17名
自分の話したことを理解しているかを確認する。例) Do you understand?	7名
日本語を使用する。	6名

その単語や表現の説明をする。 例) Sushi. It is a traditional food.	3名
複文から短文にするなど文を短くする。 例) He is a teacher who can ski well. → He is a teacher. He can ski well.	1名

(3) どのような方法を用いて英語学習をしていますか。
(上位2つを選択)

日本語や英語の相違点など分析する。	43名
単語や表現などをひたすら反復する。	33名
英語で言えない単語などを置き換える。	30名
英語を日本語に翻訳する。	26名
英語学習の計画を立てたり、学習が計画通り進んでいるかを確認したりする。	14名
友だちと協力して学習する。	5名

これらの結果を受けて、自分が発話者で他者に伝わってないと感じたときに、日本語を使用する生徒は少ない。一方で、他者の発話が分からないときに日本語を使用してしまう生徒がいる。(1)のアンケート結果で「日本語をしようする。」と答えた生徒に、「なぜ、日本語を使用してしまうのか。」と追質問をしたところ、「沈黙の時間を他者と過ごすより、日本語でも話した方が、雰囲気が良くなる。」「他者から疑問形で聞かれたときは、答えるけど、それ以外のときは、他者の言っていることが分からなくても分かったふりをする。」など会話の雰囲気を維持したい、「やり取り」の流れを止めたくないという気持ちが伺える。英語の学習方法では、分析をしながら学習している生徒は多いものの、計画を立てたり、自己の学習を修正したりしながら学習している生徒が少ない。このことをふまえて、教師や外国人交換留学生との実際の「やり取り」を通して、分からないときの多様な方略を生徒に提示することで生徒の方略的能力を育成していく。なお、本単元の指導計画は次のとおりである。

時	学習内容	評価
1	○メモやマッピングをもとに、Pre-TEST をして自分のスピーチを振り返ろう！[工夫①] ○単元の目標設定を行う。[工夫②]	指導に生かす評価
2	○卒業スピーチに向けて原稿を作ろう！	
3		
4	○発表練習をしよう！～どのように発表すべきかを考えよう！	
5	○卒業スピーチに向けてグループからアドバイスをもらおう！	
6	○卒業スピーチに向けて他者からのアドバイスをもとに修正しよう。再構築 [工夫②]	思・判・表態
7	○卒業スピーチをしよう！(Post-TEST)[工夫①] ○単元を振り返ろう！[工夫②]	思・判・表態

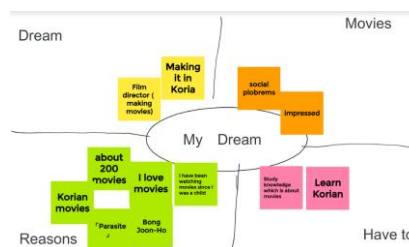
本単元では、スピーチの内容が学校生活であることから、本研究の「学びと実生活の連続性」を実現させる手立てとなる。また、毎時間の「やり取り」の中で受けた他者からの質問をスピーチに取り入れることで、スピーチの内容を充実させる。単元中盤では、グループでリハーサルを行い、他者からのアドバイスをもとに再構築する。ま

た、ALT がスピーチ発表の良い例とそうでない例を単元中盤で見せ、よりよいスピーチにするにはどのように工夫したらよいかを全体で共有させる。単元終了時には、Post-TEST やリフレクションシートを活用し、単元開始時に設定した自己の目標との変容を明らかにさせる。

5. 2. 実践Aの授業の実際

【1時間目】

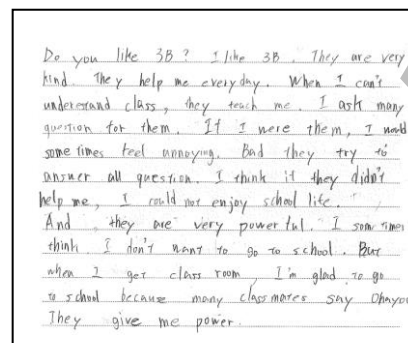
学習指導要領の外国語科の目標及び内容(4)話すこと[発表]に「中学校は『即興で』話すことができるようになることが求められる。」と記載されている。これは、メモやキーワードを頼りにしながらであっても生徒が主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことをねらいとしている。また、以下のような Chromebook の Jamboard を使用し、自分の考え、理由などを分けて整理させることで、まとまりのある内容を話すことができるような手立てとした。



【2時間目・3時間目】

前時でのメモを基に原稿を作成した。作成のきまりは以下の通り設定した。

・発表は 90 秒程度 ・原稿は 150 語・中学校生活について取り上げ、「事実」「感想」「将来」の3つの点について述べる。



スペルミス、複数形の欠落、時制の一致など形式的なエラーが見られる。

【4時間目】

スピーチ練習を一定時間行った後、ALT に発表の良い例と良くない例を提示してもらい、どのように発表すべきかを個で考えさせた後、ペアや全体で共有させた。

【5時間目】

完成後、3～4人のグループでスピーチの発表を行った。グループ内の1人に Chromebook をして発表者の録画をさせた。グループから、事実・感想・将来について

[内容面]についてアドバイスをもらった後、グループ内で既習表現や語順などの[形式面]についての正確性について確認をした。

【6時間目】

前時での他者からのアドバイスを基に発表について再構築した。以下、「内容面」「形式面」「発表面」について修正させた。

形式面：単語や表現は適切か

・強調したいものを強調する

・"The first day"ではなく、
"On the first day"

➡

↑

・I gave my family it.
・I gave it to my family.
↳ my family が強調
my family を強調したいから、
I gave it to my family. という。

発表：速さ、イントネーション、文の区切り、アイコンタクト

・アイコンタクト
・笑わない

➡

↑

台本を暗記した

【7時間目】

最後に、Post-TEST を実施して、本単元を終了した。以下が Chromebook を使用した生徒の振り返りの記録である。

- ・原稿を見ずに聞き手とのアイコンタクトを取りながら、スピーチをすることができました。今までは英語の正確さだけに気をつけてスピーチしていたけど、今回は原稿をすべて頭に入れたからこそ間の取り方やアイコンタクト、声の大きさなど聞き手に伝わりやすくする工夫ができたと思います。
- ・同じ表現を何度も使わないように特に ALT からアドバイスがあった I を we に変えた。そして、どのように表現するか迷ったら周りの人に「Do you know this word?」など「やり取り」のあとに友だちに尋ねたり、きちんとクラスみんなに意味が伝わるように分かりにくい英単語はすでに習った英単語に変えたりした。

(Post-TEST の感想)

- ・アイコンタクトを取ることで相手の調子を伺うことができ、相手が理解していなさそうであれば具体例を出して説明をするなど工夫した。自分が表現しづらい表現はジェスチャーで補足し、聞き手に情景を膨らませてあげた。このことで、他者に自分が伝えたいことを伝えやすくなることに気がついた。
- ・事実→意見→将来という構成を接続詞を用いて聞き手にもわかりやすくなるようにした。
- ・相手の方を見て話すためにはポイントは、原稿を読んで自信をつけることだと思ったので、2文、3文くらいのまとまりで覚えた。接続詞は、ジャムボードのマッピングシートを利用して、事実と考えたことを1つずつ選び、その関係性を見つけることで、接続詞を適切に使うことができた。

(単元全体の振り返りシートの感想)

5. 3. 実践Bの単元の構想

本実践を行うにあたり、本校第2学年生徒の英語の「読むこと(Reading)」「聞くこと(Listening)」2技能について、2022年11月実用英語技能検定協会の英検IBAテストを実施し、以下のよう結果が得られた。

級	5級 Lv.	4級 Lv.	3級 Lv.	3級 Lv.以上
人数	3人	10人	44人	41人

※98名受験

また、同テストの「生徒向けアンケート」からは、「英語の授業で取り組みたいと思う活動」について、以下のよう回答結果が得られた。

回答	2021年 実施時	2022年 実施時
聞いたり読んだりしたことについて自分の意見や感想を英語で言ったり書いたりする	14.6%	16.3%
手紙・メールを英語で書く	15.3%	15.7%

これらの調査結果から、本校生徒は英語の「読むこと(Reading)」「聞くこと(Listening)」2技能について高い能力をもち、その能力を用いて「話すこと」「書くこと」の表現活動に結びつけたいという興味関心が高まりつつあることがわかった。本単元では、修学旅行という具体的で身近な話題について、総合的な学習の時間や他教科等での学習内容等と関連付けながら、互いの考えや気持ちなどを英文で適切に伝え合う活動を中核に据え、ICTを効果的に活用しながら、学習活動を展開していくこととした。本単元で講じた手立ては主に以下の2点である。

①「質の高い学び」に向かうための「学びと実生活の連続性」の実現

学習指導要領「書くこと イ」には、「日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができる」と示されている。「まとまりのある文章を書くこと」で、自分が伝えたいことを適切に伝えるために、用いる言葉や表現を選んだり工夫したりする力(学習指導要領が求める思考力・判断力・表現力等)が高まると考えた。そのための手立てとして、生徒にコミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じ、既習事項の中から必要なものを自ら選択させることとした。

本単元では、2月下旬に行われた修学旅行1日目の鎌倉散策において、自分の行ってみたい名所について、生徒の興味関心や意欲を生かして、活動班での計画を立てる材料とした。加えてALTや大学で研修中の海外の英語教師に向け、よりよく伝える文章となるように必要な語句や表現を考え選択させることで学びの質を高めようと図った。

②「非認知能力」を育む単元学習の工夫

主体的に学習に臨むことができるようにするため、単元の開始時に学習の流れを把握し、Pre-TEST を行うこととした。Pre-TEST で書かれた英文の語句や表現と、その内容についてモニタリングし、再構築をするために生徒それぞれが必要な自らの学習プラン(Plan for

Improving Myself:PIM)を作成させた。加えて、ICT機器を活用し、効果的な構成や表現などを全体で共有できるようにした。具体的には、Google Formsを用いて班員にアンケートを取ることで、短時間で多量のデータを集めた。そのデータを活用し、活動班の仲間の興味関心を知りつつ、自分の行きたい場所をまとまりのある文章で伝えるという状況を設定することで、「主体性」とともに「協調性」についても高めることを図った。

なお、本単元のおおまかな流れは以下の通りである。



・作成する英文のゴールイメージ…教科書の例文を確認し、その英文をモデルに自らの考えをプラスしたい

内容

- ・修学旅行のスケジュール…しおり等での確認
- ・鎌倉について…インターネットの活用、3学年実施時の資料等の確認
- ・班員の興味関心…意見交流を行う
(Google Forms / interview)

また、授業の終末時に生徒のPIMをグループで共有し、自時からの学習について見通しを持たせた。

【グループでの交流内容】

- ・英語表現については各自で行う
- ・班研修で行いたい内容、行きたいところの交流はGoogle Formsを用い、回答期限を設定し集約する
- ・Post-TESTの前に班内で読み合い、交流を図りたい
- ・他の班の内容を把握したいので、交流のタイミング等を打合せる

【2・3時間目】

授業の前半では教科書の例を用いたり、ALTとのやり取りの中で自らの英文の内容を想起したりした。また、授業後半では前時に作成したPIMに基づいて、自らの課題解決に向け学習活動を行った。



5. 4. 実践Bの授業の実際

【1時間目】

本単元の1時間目の授業開始時に、単元の学習計画やルーブリック、単元末の振り返りに実施するリフレクションシート等を生徒と共有した。また、単元末の単元の週末と同様の内容および条件でPre-TESTを行わせた。

課題(英作文:7分間)

Write about the places you want to visit in Kamakura

その後、Pre-TESTの英文について、形式と内容についてモニタリングを行わせた。モニタリングを行った結果、次時の2時間で行う、生徒自身の課題解決に向けた学習計画PIM(Plan for Improving Myself)を作成した。PIMの作成にあたり、生徒は以下の思考を働かせていたことが分かった。

形式

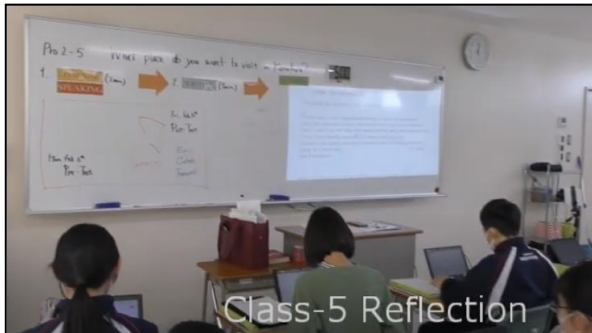
- ・単語や文法がわからない…辞書、インターネット等で調べる

2時間目はChromebookを用いて作文に使いたい未単語を調べたり、散策場所である鎌倉について調べたりしている生徒が多く、個別での学習が多かった。一方で3時間目は班員やALT、海外からの英語教員研修生とやり取りを行いながら、それぞれの希望や調べたお店などについて交流したり伝えたりし、合意形成をしながら班での計画をまとめ上げようと励んでいる様子が多く見られた。



【4時間目】

授業開始時に、1時間目で行った Pre-TEST と同様の内容および条件で Post-TEST を実施した。その後英文を班内で交流するため Google Document を用いてデジタルデータとし、語彙数やオートコレクト機能で確認できた英文のエラーなどについてモニタリングを行った。その後、英文のリンクを取得し、URL を Google Spreadsheet に張り付け、班員や学級・学年全体で交流を図った。



【5時間目】

最後に単元開始時に共有したリフレクションシートを用いて振り返りを行った。本単元を終了した。以下に生徒2名の Pre-TEST, PIM, Post-TEST ならびにリフレクションシートの結果である。

生徒 A

(1) Pre-TEST (52 語)

I want to visit 和菓子 shop. I heard this 和菓子 shop is so delicious to my sister. And it looks cute. I want to visit and eat 和菓子 with my friends. I want to visit 桜屋 shop. Because I want to buy souvenirs (お土産) for my grand parents. 桜屋 is famous for souvenirs. It is delicious to me.

(2) PIM

2	教科書の例に触れたり、必要な英語表現を確認する①
	PIM : Plan for Improving Myself ① Make speech & search words (5min.) 2 ② Search on the internet (15min.) 1 ③ Talking with my group member (0min.)
3	教科書の例に触れたり、必要な英語表現を確認する②
	PIM : Plan for Improving Myself ① Make speech & search words (5min.) 3 ② Search on the internet (10min.) 1 ③ Talking with my group (10min.) 1

(3) Post-TEST (98 語)

When we go to Kamakura on a school trip, we want to go to the street of Komachi. We want to eat a lot of delicious food. Especially, I want to eat sweets there. The street of Komachi has a lot of sweets shops. My group members like sweets too. We will eat many sweets!! After that, we will walk the streets of Wakamiya. And we want to go to the Tsurugaoka Hachimangu shurine. We can buy Omikuji. I want good omikuji! Tsurugaoka Hachimangu shurine is famous for Mr. Minamoto. I want to study Kamakura jidai's history there!

(4) リフレクションシート

・毎回軽く文章のようなものを作成し、自分が使いたい表現や単語を把握して調べることによって、文章を実際に作る時により正しく書くことができた。また、班の中でしっかりと話し合い、チームワークを大切にしました。

生徒 B

(1) Pre-TEST (30 語)

Pre-Test
Write about the places you want to visit in Kamakura! (7min.)
There is a great budda in Kamakura. A great budda is one of the most famous places in Kamakura. There are many stores in Kamakura. I want to buy something for my family. I want to visit some stores. I want to see beautiful view.

(2) PIM

2	教科書の例に触れたり、必要な英語表現を確認する①
	PIM : Plan for Improving Myself ① 鎌倉の場所を調べる (25 min.) ② 単語を調べる (10 min.) ③ グループの人に聞く (5 min.)
3	教科書の例に触れたり、必要な英語表現を確認する②
	PIM : Plan for Improving Myself ① 鎌倉の場所を調べる (10 min.) ② 単語を調べる (10 min.) ③ グループの人に聞く (20 min.) → メイン

(3) Post-TEST (154 語)

I want to go to Tsurugaoka Hachimangu Shrine. This place was built in 1063. This place has a long history. So I want to know about it there. My group members and I want to buy an amulet to pray for success in high school. I want to enjoy seeing the beautiful view there. I'm looking forward to visiting there.

There are about 250 small shops in Komachi street. I want to visit various shops with my group members. My group members and I like sweets. So we want to go to "Sakura no Yumemiya" where dumplings are sold. I want to enjoy eating sweets with them. I want to buy something for my family in Komachi street.

I want to buy something for my family on a school trip. And I want to talk about a school trip with my family. I'm looking forward to going on a school trip with my classmates.

(4)リフレクションシート

・グループの人の考えなども文に取り入れていくために、最初の時間に鎌倉の場所を調べて、その後使える文法や単語をまとめる事で、使える表現などが分かり、交流をする際に自分の考えを相手に伝えることができました。またグループの人の考えを知ることができました。交流をする際には、グループの中で共通している部分を見つけたり、他に使うことのできる文法や自分の知らない単語を交流するように工夫して行くことで、文章の内容をより深めることができました。最初は鎌倉について多くのことを調べていたのですが、後半では一つのことについてよりくわしく調べるように改善することで、効率よく学習を進めることができ、文章がまとめやすくなりました。計画的に文を作るために達成度%をもとに、次回何を最初にするべきかを考えて学習を進めることができました。

6. 今年次研究の成果と課題

本稿では、これまでの本研究の成果と課題、及び「今後の展望」を述べる。

6. 1. 研究の成果

本校英語科では、1年次に、「コミュニケーションの機会を求め、積極的に話そうとする生徒の育成」を主題とし、「やり取り」や「スピーチ」など発表する機会を多くした。まずは、「量的」に発話量を増やしたことで現在の自己の言語能力で理解できることと、理解しているが表現できないことの言語間ギャップに気づかせることができた。また、生徒の感想として「具体的に細かく話したことで、知らない単語が増えた。」「内容を掘り下げて話そうとすればするほど、この語彙や表現がふさわしいのかどうか疑問に思った。」など具体的に話すことと情報や使用する単語や表現を精選することの必要性を感じた。

1年次における成果の上に立ち、2年次では、コミュニケーションの質に着目した。コミュニケーションの質とは、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションの目的や場面、状況をふまえて状況を整理しながら話すこととした。そこで、Try out 活動において身近な話題を取り上げることで、話しやすいピックを常に取り上げることで生徒のコミュニケーションへの積極性を維持しつつも、生徒自身がコミュニケーションの目的や場面、状況をふまえて、使用する語彙や表現を判断し、コミュニケーションに取り組んだ。また Pre-TEST や Post-TEST を通じて、自己の課題に気づいたり、他者にとって、より分かりやすい内容にするための手立てを考えたりするなど粘り強く取り組むことができる生徒が増えた。1年次研究では、積極的にたくさん話す機会を与えることを重視したが、2年次研究では、コミュニケーションは生徒自身が話したいことを単に話すのではなく、他者との関わりを意識しながら取り組むことが鍵となることを生徒自身が気づいたことが成果であった。

最終年次では、副題を「効果的に意思伝達をする英語

学習者の育成に向けた方略の研究」とした。これまでの2年の研究の成果と課題を踏まえて、場面や状況、目的を主体的に判断しながら、使用する語彙や表現を選択する力を育成することができた。また、ICTを活用したことで、瞬時に自己の学習を振り返ったり、他者の考えを共有したりすることができた。しかしながら、英語が得意としている生徒にとっては、語彙や表現が単元の学習に対してすでに豊富であることが考えられるが、英語を得意としていない生徒にとってはコミュニケーションを支える語彙や表現が少ないことも多い。このような生徒にとっては、他者が自分よりも高い英語力を保持しているならば、他者に自己の英語レベルに合わせてもらうなどのコミュニケーションの方略も身に付けさせることもコミュニケーションの質を高めることに役立つと考えた。コミュニケーションを工夫して進める方略の手立てとして、ALTから様々なコミュニケーションの方略を提示してもらうことや意図的にコミュニケーションが上手いできない経験を生徒自身にさせた。その結果、5月よりも1月実施のChromebook のアンケートから、他者の言っていることが分からない場合に「You mean~, You said~, right?」と他者の発話を引用しながら確認する方略を取る生徒がわずかではあるが増えた。また、日本語を使用する生徒も減少した。また、自分が発話者で他者が自分の言っていることが分かっていないと判断した際に取りる方略として、別な語彙や表現に置き換える生徒が最も多く、自分が使用している単語を説明したり、複文から単文にしたりするなど工夫する生徒がわずかではあるが増えた。また、5月と比べて、「日本語を使用しないように心掛けた」という生徒の大幅な増加や「相づちやリアクションを多くすることで、他者が話しやすくなるような雰囲気づくりを心掛けた」という生徒がいた。これは、ただ単に使用する語彙や表現を他者に対応させたことだけでなく、雰囲気づくりなども意識した表れだと考える。

6. 2. 今次研究の課題と今後の展望

以上の成果があった今次研究であるが、その一方で課題もいくつか見られる。例えば、以下である。

①個に応じた指導のための授業デザイン

日常生活においてICTを活用することで、以下の教育的効果があった。多様で大量の情報を収集、整理・分析、まとめ、表現といった文書の編集ができること。時間や空間を問わず、音声やデータを送受信でき、生徒の思考の過程や結果を可視化できること。瞬時の情報共有が双方向でできること。つまり、学校外でも学びを止めないことができる。現代社会において、当たり前のようにICTを使用しているが、今後も受け身ではなく手段として積極的にICTを活用していかなければならない。しかしながら、中には英語を苦手とする生徒もおり、このような支

援の必要な生徒に重点的な指導を行うことや一人一人の学習進度に応じて、学習方法を提示する柔軟な授業デザインが必要だと考える。また、生徒自身も主体的に学習方法を選択することが、個別最適の学びにつながる。例えば、書く活動において、英語が得意な生徒に添削してもらったり、ICT のオートコレクト機能を活用したりして、自己の作文の正確性を向上させることもできる。このように多様な学習方法を生徒が主体的に普通の授業から選択・判断していくことが大切となる。

②「協働的な学び」の充実

令和3年度答申課程部会の審議のまとめで「協働的な学び」について、「子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する。」と述べられている。コロナ禍では、様々な活動が制限されてきたが、他者と学び合うことや他者と関わりながら生きていくとの重要性を体感させることが今後求められる。最終年次は、研修生として来日したガーナ、モロッコ、ウズベキスタン、ブラジル人に本校の英語授業にも参加してもらった。このようなあらゆる他者との関わりを通じて学んだことは、生徒の生涯の財産となるだけでなく、今後、社会の変化は加速度を増し、予測困難となる状況下において、多様な英語に触れることは必要不可欠となる。生徒一人一人には、得手不得手がある。分析することを得意とする生徒もいれば、分析したことをまとめることが得意な生徒もいる。役割分担を明確にし、個の得意分野を生かした「協働的な学び」が個や集団における達成感や充実感につながる。

注釈

- *1 生徒が既習事項の中から必要なものを自分で選んで(即興で)話す活動。日頃の授業でターゲット・センテンスを主に練習させることで終わらずに、それまで習ったことを活用するために、生徒が自分で選び、話す時間を作ることによって、コミュニケーション能力を育成する活動。
- *2 本校で述べる「コミュニケーションの質」とは、ただ単に自分の伝えたいことを述べるのではなく、他者を意識しながら使用する単語や表現を判断したり、場面や状況に応じた表現であるかを自ら考えたりしながらコミュニケーションを図ること。
- *3 本校研究においては、「リフレクションシート」で自己の学習を振り返るだけでなく、自分が発話した内容を振り返るという意味合いで総括して総称した。
- *4 スティーブン・クラシェンが唱えた意識的に「学習」した知識は、「習得」されたシステムによって発話しようとしている内容が正しいかどうかをチェックするモニターとして機能し、このモニターによって発話の内容を変えることができるというモ

ニター仮説を本研究では、形式面だけに着目し、このように総称している。

- *5 英語で自分が言ったことが他者に通じない、他者の言っていることがわからないなど思うようにいかないことを経験することが、非認知能力における「粘り強さ」として捉える。他者のレベルに応じて、使用する単語や表現などを合わせていくことを非認知能力における「対応力」とする。またプロジェクト型授業を通して他者と協力して取り組むことを非認知能力における「協調性」として本校英語科として捉える。
- *6 本校研究においては「マイ・ボキャブラリ」を以下のように定義する。「マイ・ボキャブラリとは『単元末の課題を達成するにあたり、教科書で扱われる語彙に加え、生徒それぞれが自分の考えを伝えるために必要な語彙』とし、本校研究で述べる「自分の英語」における「語彙」の範疇とする。

参考文献・論文

- (1)文部科学省。「新学習指導要領解説 外国語編(2019年7月)」.p135
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(65)」
- (3)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(66)」
- (4)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(67)」
- (5)中央教育審議会。「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(平成28年12月)」
- (6)文部科学省。「学習指導要領解説(平成29年7月)」
- (7)石塚博規。「小中連携Q&Aと実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント」。開隆堂出版.2011
- (8)松浦伸和。「中学校外国語科における『主体的・対話的で深い学び』の学習指導の改善と充実」。公益財団法人日本教材文化研究財団.2017
- (9)西岡加名恵。「『逆向き設計』で確かな学力を保障する」。明治図書.2008
- (10)高見砂千。「言語活動の充実を図る『逆向き設計』による中学校英語科の指導に関する研究―授業デザイン力を高める「逆向き設計シート」の開発と実践―」。2012
- (11)大修館書店。「英語教育5月号」。2021
- (12)高橋昌由。「英語×『主体的・対話的で深い学び』」。大学教育出版.2021
- (13)村野井仁。「第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法」。(2006)
- (14)Canale, M. & Swain, M.(1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. Applied Linguistics.
- (15) Lorin, A. & David, K. (2000). A Taxonomy for Learning, Teaching, Assessing. Longman.